

推論と認知：言語学の立場から

田窪 行則
京都大学

1 導入：譲歩節を導くトコロデ

次の例ではトコロが譲歩的条件文に用いられている。

(1) 彼が来たところで、何も起こらないだろう

(1)は前件に「ところ+で」（以下トコロデ）という形式で現れ、「ても」（以下テモ）と同じような譲歩の接続助詞の役目を果たす。場所や位置を表す形式名詞であるトコロが、どのようにして譲歩を表す接続助詞の機能を果たすのだろうか。以下ではトコロデによる譲歩文の特徴、テモをとる譲歩文との比較で見て、これらがトコロが参照点を表すという特徴づけ(田窪(2006:第4章))と、言語表現の言語使用者の知識変化に対する貢献という観点からどのように説明されるかを見る。

2 トコロデの基本的機能

トコロデは節的要素をうけて接続助詞的に用いられる。トコロデの接続助詞用法は、時点・契機と譲歩条件がある。譲歩のトコロデは時点・契機のトコロデと異なって、疑問詞の影響力が前件にとどまり、ガ・ノ交替が起きず名詞性を失っている。

- (2) a. 彼女が入ってきたところで、パーティが始まった。(時点・契機)
b. 誰が入ってきたところで、パーティーが始まったの?(疑問詞疑問文)
c. 彼女の入ってきたところで、パーティが始まった。(カ・ノ交替可能)
- (3) a. 彼女が入ってきたところで、パーティーは始まらない。(譲歩条件)
b. 誰が入ってきたところで、パーティーは始まらないの。(真偽疑問文)
c. *彼女の入ってきたところで、パーティは始まらない。(カ・ノ交替不可能)

トコロデの時点・契機の解釈は、トキと言い換えられ、一つの場面や状況が別の場面や状況の生起する契機となる。譲歩の解釈はテモと言いかえられる。時点の解釈は、場面や状況がより大きな事態の系列のなかに埋め込まれることで得られる。

3 トコロデ譲歩文の統語的特徴と領域の性質

トコロデを譲歩条件の前件として解釈できるのは、夕形をともなうものだけである。

(4) 彼が来{た/*る}ところで、事態に変わりはないだろう。

未来の出来事を表す副詞もとれることからトコロデが後続する夕形は時制を表すものではなく、仮定の事態を表すといえる¹。

(5) 彼が明日来たところで、どうしようもない。

テモ譲歩文と異なり、トコロデ譲歩文は予定の不变更などを表すことができず、(7)のように前件と後件の間の論理関係を表す場合だけである。

- (6) 田中が遅れて来{テモ、??タトコロデ}、待っていっしょに出発しよう。
(7) 田中が2時に来たところで、会議にはもう間に合わないだろう

譲歩解釈を取る場合、前件 p は仮定の状況をあらわし、後件 q は基本的に変化ではなく特定の事態や状況を表す。もし、後件が変化を表し、特定の時間や場所を伴って解釈できれば、前件も、時点を表す解釈になり、契機を表す。いわば、譲歩の解釈と契機の解釈は相補分布をなすといつてよい。例えば次の文を見られたい²。

(8) 彼が来たところで、パーティーは終わる。

この文の解釈は譲歩と時点解釈で曖昧である。時点解釈では、[彼が t に来た]により、t の時点を確認

¹ 発話時、参照時以前の事態を表すときは、テイル形を使う。

) 彼が昨日パーティーに来ていたところで、どうしようもない。
) ??彼が明日パーティーに来ていたところで、どうしようもない。

² 実際には、トコロデがとる節の構成要素が異なるので厳密には相補分布をなすとはいえない。譲歩文では、アスペクトが区別されなくなる。

し、この時点が[パーティーが t に終わる]の時点 t との一致を述べる解釈になる。この場合、前件は後件の方の生起の時点を表す契機の意味になる。これに対し、譲歩に取る場合は、前件、後件ともに時点は無関係となり、事態が成立するかしないかだけが問題となり、[彼が来た]が真である場合、[パーティーが終わる]が真であることを表す。

さて、「p が真である場合、q が真である」という解釈が譲歩になるのは、譲歩という概念の定義的性質による。ここで坂原(1991)などに従い、譲歩条件は、条件文の否定であるとしよう。条件文 p q がなりたないことを示すには、その反証例を挙げればよい。条件文 p q は、p が真であるときに q が偽であることはないという意味である。このときの反証は、p であり $\neg q$ である整合的な状況、p $\neg q$ が存在することを示せばよい。また、「p れば・たら q」は、その強い主張では、q という帰結は p でなければ生じない、すなわち p であるときのみ q であるという意味で使う場合がある。これは、p と q の間に因果的な関係を想定した解釈であり、暗黙の想定 A が設定されて、q であるために p 以外のほかの要因がないことが想定される場合である。この場合は、 $\neg p \neg q$ 、すなわち、p が q の必要条件(つまり、q p)でもあることを主張する場合に使うこともできる。これを否定しようとするれば、この反証である、 $\neg p q$ であることを示せばよい。

p を「この薬を飲む」、q を「クラークケントが死ぬ」とすると十分条件、必要条件の否定は次のようになる。

(9) この薬を飲めばクラークケントは死ぬ。

- 十分条件の否定

この薬を飲んでもクラークケントは死なない。
この薬を飲んだところでクラークケントは死なない。

- 必要条件の否定

この薬を飲まなくてもクラークケントは死ぬ。
この薬を飲まなかったところでクラークケントは死ぬ。

十分条件の反証は、想定に前件を加えても後件が成り立たないこと、必要条件の反証は前件が成立している場合以外に後件が成り立つ場合があることを表している。どちらの場合も、譲歩文では前件が p 以外に存在することを表しており、量化が可能であることを示している。モは、後件の成立が条件文の前件以外の場合でも成り立つことを表す。テモは、テによる連言の機能とモによる累加の機能により、譲歩的解釈が成立することがわかるのである。

しかし、トコロはモノのような累加の助詞が関与しない。トコロデは、どのようにして条件文の反証としての譲歩的解釈を受けるのであろうか。

田窪・笹栗(2002)では、譲歩文におけるトコロデは、先行文脈で与えられた命題の真偽値をフリップする役目を果たすと考えた。0 1、1 0 のごとくである。

つまり、テモによる譲歩とトコロデによる譲歩は基本的な構成は同じであるが、前件の作り方が異なり、「(p では q だが) p でなくても q だ」という意味となると考えたわけである。テモ譲歩文は前件に複数事態を羅列することが可能であるのに対し、トコロデ譲歩文では前件に複数の事態を述べるのが不自然であることもその証左となる。

- (10) ダイエットをしても散歩をしてもやせない。
- (11) ??ダイエットをしたところで、散歩をしたところでやせない。

しかし、この前件の真偽値のフリップという操作は単なる規定で、トコロデに関する意味論のどこからも出てこない。そこで、以下では、契機と譲歩のトコロデを基本的に同じものとみなし、トコロとデの意味論と言語表現解釈の話し手(および聞き手)の知識変化への貢献という観点から、譲歩の意味を導き出すことを試みる。

4 トコロデの意味

ここでトコロデの持つ以下の性質がトコロとデの意味からどのようにして導出できるかを考えよう。

トコロデ：

- 反事実を表さなくてもよい。
- 譲歩文の前件に来る。
- タが義務的である。

p、q として先ほどと同じ次のような命題を考えよう。

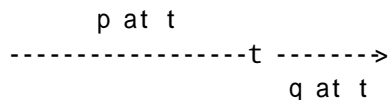
- p : 田中が 2 時に京都駅に着く
- q : 田中が会議に間にある。

- (12) a. 2 時に京都駅に着いたところで会議には間にあわないだろう。
- b. 2 時に京都駅に着いていたところで会議には間にあわないだろう。
- c. 2 時に京都駅に着いていたところで会議には間にあっていなかったらう。

2 節でみた契機のトコロデは、アスペクト形式につき、前件を契機として後件が起きるといふ変化の契

機点を表した。契機の用法では時系列上の点を基準点として同定し、それを変化の契機とみなすことができる。

(13) 時点の系列



譲歩文のトコロでも、命題の系列における点を基準点として同定することが可能であろうか。

ここで領域として次のものが挙げられる。時系列が水平方向の系列であるのに対し、命題の系列は垂直方向、すなわち、可能世界の方であると考えられる。譲歩文では、想定された命題の集合 A に前件を加えて、後件を帰結として導出する。

まず、前件をフリップする場合を見てみよう。b、c では V - テイタで表される事態はすでに起きた事態である。主文のテンス・アスペクトから b の例では、p が起きたが話し手は真偽をしらない。c では、p が起きて、話し手はそれが偽であることを知っている。後者の場合、p を加えることで前件の真偽値はフリップする。

話し手の知識状態 A が $\neg p \quad \neg q$ を含んでいるとする。このとき、 $p \quad q$ という想定があるとすると、+ をある想定状態への知識の付加を表すとし、>> を状況変化、あるいは認知状態の変化とすると、ある時点で +p という操作により、 $\neg p >> p$ という状況変化や信念の変化があれば、条件的知識 $p \quad q$ により、状況の認知や信念が $p \quad q$ へと変化することが期待される。そのとき、 $\neg p >> p$ と変化しても、それにもなると信念が $\neg q >> q$ とかわらないとき、すなわち、

(14)

- い) 参照時の話し手の想定: $(\neg p \quad \neg q) \quad (p \quad q)$
- ろ) 状況の認知: +p
- は) 信念の変化: $\neg p >> p$
- は) (ろ) にもなう (い) の変化: $p \quad \neg q$

であるとき、p タトコロデ q は、 $p \quad q$ への反例としてはたらく。ここで、VP - タという表現は、+ という、参照時の状況に対する命題の付加の結果の状況を表すとすると、実はこの + という操作は、譲歩の場合だけでなく、契機解釈の場合でも同じであると思われる。契機解釈における VP1 タトコロデ VP2 という形式は、f をインターバルから時点を取り出す関数とし、VP' を VP のインターバルとすると二つの時点の関係で表せる。

(15) $f_i(VP'2)$ at $f_i(VP'1)$

(15) で $f_i(VP'1)$ は、参照時、すなわち話し手の視点の存在する位置を表す。また、契機のトコロデが変化の契機を表すのは、後件が非状態述語であるからであるとみなすことができる。

これに対し動的述語 VP がアスペクトを持たず、時間的に縮退³した場合が命題を表すとすると、譲歩文のトコロの性質を説明することができる。時間が縮退した場合、at が、知識状態を表すとしよう。

p タトコロデを A という想定状況において +p という操作を行った結果を示すとした。p タトコロデ q は次のようになる。

(16) $q \text{ at } A+p$

やはり、 $A+p$ に話し手の参照視点がある。さて、+p により状態が $\neg q$ から q に変化したとする。

(17)

- 状態 1: $\neg p \quad \neg q, p \quad q$
- 「p タトコロデ」の解釈に相当する操作
- 状態 2: +p
- 状態 3: $\neg p >> p$
- 状態 4: $p, p \quad q \quad q$
- q が帰結する。従って、状態 5 がえられる。
- 状態 5: $p \quad q$

このような論理操作により、現在の状況に +p という思考実験操作を行った帰結を述べる事が可能である。

(18) 消費税があと 2%上がったところで、日本経済はインフレから抜け出せるだろう。

ここで、q は $\neg q$ からの変化をあらわし、契機の読みになる。すなわち、前件の変化に伴って、後件に状況の変化がある場合は、後件は非状態述語がくるか、状態述語であっても変化の解釈がされて、契機の解釈が強制される。つまり、変化の解釈が時点の導入を強制すると考えられる。後件に時点解釈がなく、命題の真偽に関する解釈しかない場合は、後件は変化してはいけないのである。

後件が変化しなければ、前件が想定になくとも譲歩の解釈は可能である。トコロが参照点をあらわすとすると、p タトコロデは、p の状況が参照点で成立することを示す。すなわち p タトコロデは想定 A に p を付けくわえた時点、 $A+p$ が成立している状況に参照視点があることを意味する。タは、参照点

³ 縮退(degenerate)は Igarashi & Gunji(1998)の用語

がAより後に移行したことを示すと見てよい⁴。
(12)でaは、Vの語幹にタトコロを加えるため、pもqも未定である。しかし、トコロデの意味より、後件は $\neg q$ が想定されている。このとき、 $p \neg q$ は次のことを言っている。

(19)
状態1: pの真偽が未定の状態: $p \neg p$
状態2: +p
状態3: $p \neg p \gg p$
状態4: $\neg q$ at p

$\neg q$ at p、すなわち、 $p \neg q$ は、pの真偽が決まっていない状態から、pを付けくわえることでその真偽が決まった状態に移行し、そのときに $\neg q$ であることを表す。このとき、話し手は $p \neg q$ が整合的であり、参照時である将来の状況で、知識状態($p \neg p$)という状態から、pという状態に移行したとき、このpの付加によってqが変化しないと主張していることになる。従って、この言明は $p \neg q$ の反証になっている。このとき、もし、 $\neg p \neg q$ が整合的であるという意見を持っているとすると、 $\neg p \gg p$ への真偽値のフリップがあることになる。しかし、このとき話し手は $\neg p \neg q$ が整合的であるかいなかについて意見を持っている必要はない。単に、pが付加されて情報量が増えたというだけでかまわない。すなわち、フリップしたと考える必要は特にないのである。bの場合も話し手はpの真偽をしらないため同じことがいえる。

cの場合は、想定として $\neg p$ があり、qの真偽値が変化しないため、+pの時点で $\neg p \neg q$ が想定されている。

(20)
現在の想定状態1: $\neg p \neg q$
状態2: +p
状態3: $\neg p \gg p$
状態4(反証すべき想定): $p, p \neg q$
状態5: $\neg q$ at p

このとき「pたところで $\neg q$ 」というかたちで $p \neg q$ を主張するとき、 $p \neg q$ が否定されると同時に、参照時点での想定が $\neg q \neg p$ であることから当然のことながら、 $\neg p \neg q$ も否定されている。つまり、pの真偽とqの真偽は関係ないから、pの真偽をフリップしても $\neg q$ は変化しないと主張しているわけで、これは反事実譲歩文の解釈として非常に自然である。

以上、「pたところでq」において、後件qが想定とかわらないという非常に自然な規定を設けることと、「pた」が想定にpをくわえ、その時点を参

照時とするという定義により、「タトコロデ」の属性が導き出せることを示した。これにより、田窪・笹栗(2002)の説明にある、反証される条件文の前件をフリップしてトコロデ譲歩文を作るという規定は反事実譲歩文にしかなりたないことがわかった。かつ、反事実譲歩文で前件がフリップする場合を規定なしで、導出できることを示した。

5 まとめ

譲歩の意味は、条件文の反証であり、十分条件の否定、必要条件の否定の両方を、前件が対照集合を持つ連言で表すことができる。本章ではこの譲歩の意味が与えられたとき、タトコロデの譲歩の用法は、(い)の規定と、以下のようにその構成要素の意味の組み合わせから構成的に説明できることを示した。

い) p タトコロデ譲歩文は、文脈の想定Aにpを加える。そのとき

- a. pが決定していないとき:Aより以後の時点でpを加える。
- b. pが決定して話し手が真偽を知らないとき:Aのある時点でpを加える。
- c. pが決定して話し手が真偽を知っているとき:Aのある時点以前にpを加えて、それと矛盾する $\neg p$ があれば取り除く

ろ) トコロは視点のある参照時を表す

は) タは命題を加えた後の状況に視点を移動させることを意味する。

に) デが後件の状況が前件の状況で成立することを意味する。

言語表現はそれ自身の語彙的、統語的性質を持っている。このような言語表現の性質と密接に関係しながら、ほぼ独立的に、論理認知的操作が存在し、言語表現はそれを組み合わせることで特定の論理認知操作構築できる。言語の解釈、産出はこの二つの操作の結果をできるだけ近づけるための最適解の計算のようなものとしてとらえる、という考え方について述べた。

参考文献

- Igarashi, Y. and Gunji, T. 1998. The Temporal System in Japanese. *Topics in Constraint-based Grammar of Japanese*, ed. by T. Gunji and K. Hasida. Dordrecht: Kluwer.
- 坂原茂(1993)「条件文の語用論」益岡隆志(編)『日本語の条件表現』東京:くろしお出版。
- 田窪行則・笹栗淳子(2002)「日本語条件文と認知的マッピング」大堀俊夫(編)『シリーズ言語科学3 認知言語学:カテゴリー化』:135-162. 東京:東京大学出版会。
- 田窪行則(2006)「日本語の条件文とモダリティ」京都大学博士論文

⁴ 「後」というのは時間的に「後」であることを意味しない。時間を持たないイベント系列上で後であってよい。